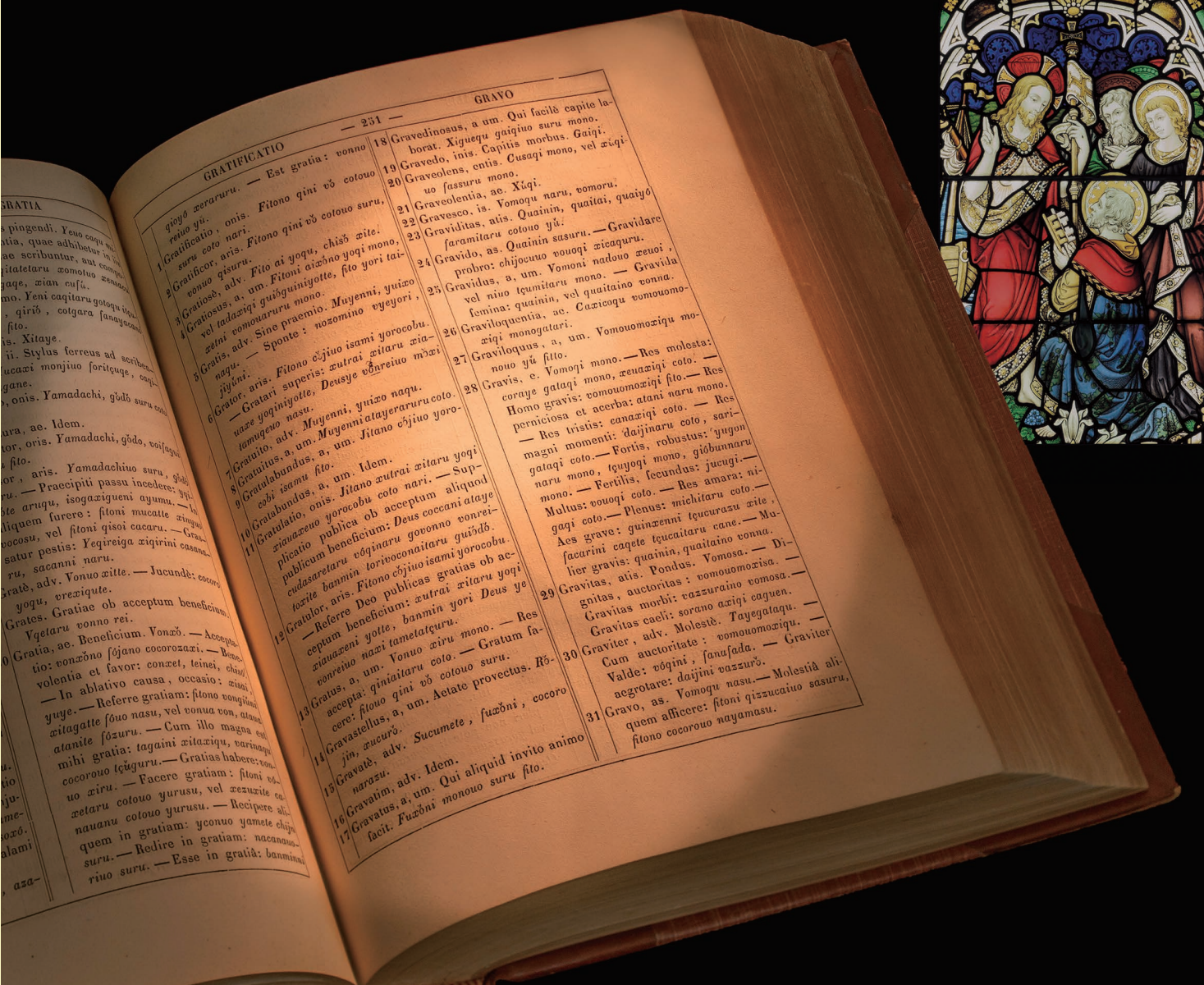


図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2020.
October
No.189



新型コロナウイルス感染症

1 パンデミックの過去と現在
図書館長 北垣 徹

2 新型コロナウイルス感染症
図書館の取り組み

3-4 世界の図書館

ハンプルク大学法学部中央図書館
法学部 国際関係法学科 教授 佐古田 彰
国立台湾図書館
図書情報課 副課長 山下 大輔

5-6 大学図書館のニューノーマル？
英仏・知の世界へ 時空を超えてひとつ飛び

鼎談者：外国語学部 外国語学科 教授 北垣 徹、武末 祐子、三宅 敦子
聞き手：図書情報課 川崎 陽奈

7 蔵書ギャラリー no.29

ブレイク版『羅日辞書』
大学博物館 助教 下園 知弥

新型コロナウイルス感染拡大により、今春は卒業式も入学式も中止され、前期はすべて遠隔授業となりました。後期になっても、対面の授業はゼミなど少人数の授業にかぎられ、多くの学生たちの足はなおキャンパスから遠ざかっています。大学図書館の方も4月から閉館し、貸出業務のみの状態を余儀なくされました。ようやく閲覧席が使えるようになったのは、後期が始まる直前のことです。こうした事態は、国内のみならず世界中の大学で共通しており、本学の協定校のあるアメリカ合衆国やイギリス、フランス、イタリアでは、日本よりはるかに厳しい外出制限の措置が取られてきたようです。

このような状況下で在宅時間が増えるなか、これまで以上に書物を手にする人も多かったみたいですね。そして、今現在を把握する手がかりにするためにも、過去の感染症にかんする本がよく読まれたようです。アルベール・カミュ『ペスト』（1947）も、改めて世界的なベストセラーとなりました。本書の舞台は、出版当時はまだフランス領だったアルジェリアのオランです。この港町が突如としてペストに襲われ、感染拡大を防ぐために遮断されます。その中で、医師リウーと友人たちはペストに立ち向かうが、その奮闘ぶりとはまったく無関係に、病は蔓延を続けるかと思えば、ある時を境に、急に潮が引くように終息に向かいます。その不条理さを描くカミュの筆致は、以前とは異なる生活を突然強いられ、不安と鬱屈のなかにいる現在の読者の心を、以前にも増して強く捉えたことでしょう。

ダニエル・デフォーの『ペストの記憶』（1722）を、私はこの機会に初めて読みました。カミュのもデフォーのも、どちらもフィクションですが、デフォーの方は1665年のロンドンでのペスト大流行を踏まえて書かれており、細部の描写はよりリアルです。カミュのペストはファシズムやナチズムなど、何か別のものの隠喩のように読めます。たいしてデフォーの主人公は、神の啓示とか魂の導きとか眩しながらも、理想主義的なリウー医師とはかなり人物像が異なり、根っからのジャーナリストというか、たんなる好奇心でロンドンの街路をぶらついていました。当時の外出制限の措置は、今からは想像しがたいほど厳しく、感染者の出た家屋は外側から閉鎖され、監視人が置かれて町中の牢獄と化し、健常者もろとも閉じ込めました。しかし監視の目を逃れて脱出しようとする者が後を絶たず、かえって感染を広げる結果になったようです。デフォーは、まるで統計資料のように、街区ごとの死者数を時系列に沿って列挙するかと思えば、デッド・カート「死の車」が遺体を運んだり、裸の亡骸が山積みになり埋葬される様子も、丹念に描き出しています。膨らんだ腫れ物による激痛でのたうち回り、自暴自棄になってテムズ川に飛び込む者や、何の前触れもなく路上でバツリと倒れて亡くなる者など、数字では一括りにはしがたい様々な死の姿も垣間見られます。海運業など多くの仕事が失われ、人びとが貧困に陥って食べ物にも事欠く様や、それを救おうとする寄付活動についても、細かく描かれています。

ノンフィクションとしては、アメリカの歴史家アルフレッド・クロスビーの『史上最悪のインフルエンザ：忘れられたパンデミック』が、しばしば引き合いに出されました。そして、第一次世界大戦末期の1918年から翌19年にかけて世界中に

広がったインフルエンザの記憶が甦りました。本書を読むと、同じ新型インフルエンザの感染拡大でも、現在のそれとの違いがよく分かります。共通点がある分、相違点も際立つと言えるでしょう。この感染症は北米大陸のどこかで発生し、1918年の春から夏にかけて、まずアメリカ合衆国で感染が広がりました。そして、大西洋を越えてヨーロッパ戦線に向かう兵士たちを通じて、フランスなどへも広がっていきます。当時インフルエンザは、結核やマラリアほど恐れられておらず、法定伝染病にも指定されていませんでした。したがって、統計的な詳細は不明な点が多く、また戦時中で情報統制も敷かれていたため、感染状況は現在のように十分に公表されていません。合衆国では、戦時公債公募のためのパレードや集会で多くの人びとが集まり、それが感染を拡大させたとも言われています。現在、大統領選のキャンペーンがオンラインで行われているのとは大きく異なりますね。結果として、交戦国ではなかったスペインでは、国王が罹患したということもあって感染拡大が目立ち、「スペイン風邪」「スパニッシュ・フル」という名前が付いてしまうことになりました。この国が発生源でもなく、最も感染がひどかったわけでもなかったのですけど。他方で今回は、発生源の地名や「豚」「鳥」などの動物の名前が避けられ、covid-19という記号的な病名が定着しています。

100年前と現在との大きな違いは、当時はまだウイルスの存在が知られていなかったことです。細菌よりもずっと小さなウイルスは、光学顕微鏡では観察することができず、その特定は1930年代の電子顕微鏡の登場を待たねばなりません。今は、ワクチンなど治療法はまだ確定していませんが、角のようなものが突き出た球形のウイルスは、よく知られたアイコンとなっています。また今なら、ウイルスのRNAを調べて変異を追跡することもできます。しかし1918年秋の第二波、そして翌19年の第三波では、病毒性が増し、むしろ15～35歳の若者のあいだで多くの死者が出るようになるのですが、その原因も分からず、ただ対処に追われるだけだったでしょう。そして何より大きく違うのは、当時はインフルエンザにかんする正確な統計はなく、感染者数・死亡者数の詳細は不明だが、それでも今とは桁違いの死者が出たのは確かだろうということです。クロスビーは、1918年9月から1919年6月の合衆国におけるインフルエンザと肺炎の死者数を67万5000人と見積もっています。他国については、死者数をインドだけで2000万人、世界全体で3000万～4000万人と推測しています。より最近の研究によれば、この数字はさらに増え、5000万～1億人となっています。衝撃的な数字ですが、同時に驚くべきは、クロスビーの本のタイトルが示すように、このパンデミックがすぐに忘れ去られてしまい、長らく歴史のなかで扱われなかったことです。それが現在のパンデミックによって甦りました。どうやら、歴史は後ろに残されるのではなく、前からやって来るもののようです。

参考資料

カミュ『ペスト』宮崎嶺雄訳、新潮文庫、2004年[3階G:電動集密095/953/12]
ダニエル・デフォー『ペストの記憶』武田将明訳、研究社、2017年[6階C:通常書架930/26/113-3]
アルフレッド・クロスビー『史上最悪のインフルエンザ：忘れられたパンデミック』西村秀一訳、みすず書房、2009年[5階C:通常書架493/87/25]
Freddy Vinet, *La Grande Grippe : 1918. la pire épidémie du siècle*, Vendémiaire, 2018年[5階E:ブックツリー内回り493/87/3]



Freddy Vinet, *La Grande Grippe: 1918. la pire épidémie du siècle*

新型コロナウイルス感染症

図書館の取り組み

図書館では、4月当初感染症対策のため、臨時閉館し、大変ご迷惑をおかけいたしました。改めてお詫びいたします。事態は、本号発行時にも、継続しているものと思います。図書館としての取り組みについては、事態収束後に振り返りたいと思いますが、今号では、感染症対策への図書館の基本姿勢等について、ご説明いたします。

1

図書館資料を継続して提供します

図書、雑誌等の冊子体資料へのアクセス（貸出、複写）については、何らかの方法で提供を継続することを原則としています。状況に合わせて、予約利用、郵送提供、入館しての利用について選択していくことになりますが、必要な資料がお手元に届く方法を確認していきます。

合わせて、オンライン資料を拡充しており、今後も継続して整備していきます。電子ブック、電子ジャーナル、データベースは、全て図書館のウェブサイト及びOPAC（蔵書検索システム）のいずれかからアクセスが可能です。契約の関係上学外からのアクセスには、VPN接続を行っていただく必要がございます。

2

学修サポートを継続して提供します

従来、館内のラーニングサポートデスクに、大学院生や学部上級生を配置して実施していた学修相談について、何らかの方法で継続します。現在は、ウェブサイトのフォームからのアクセスとなっています。作成したレポートや文書、課題等についても添付いただけます。既に70件以上の回答を行っておりますので、お気軽にお尋ねください。ラーニングサポートスタッフによる回答が難しい場合でも、他部署のご紹介等行っております。

今後、館内での対面での相談、オンラインでのリアルタイム相談等を計画しています。感染状況により、適切な方法を選択していきます。

3

専門的視点からの レファレンスを提供します

図書館司書の専門的見地からのレファレンスを継続して提供します。学生、教職員等学内関係者から広くご相談をお受けいたします。情報の探索・調査、資料の探索、具体的な利用、著作権の確認等、ご不明点について、いつでもお寄せください。

4

オンラインイベントを 継続して計画します

前期は、合計25回のウェビナー及び10回の学修相談会を開催し、夏季休暇中はオンデマンドでのレポート作成講座を提供いたしました。今後とも、継続して、図書館の活用、資料の利用、学修相談等のオンラインイベントを継続して計画していきます。

5

オンデマンド資料を 順次提供します

夏季休暇中のオンデマンドによるレポート作成講座は、9月末で終了しましたが、今後も図書館職員及びラーニングサポートスタッフが作成する学修教材を順次提供していきます。

以上、継続した情報源及びサポートを提供していくことで、学内の教育・研究をサポートしていきます。一方で、集う場所としての図書館をどのように再開していくかは、今後の課題です。

今後の課題

現在の図書館の課題は、2017年に現図書館のサービスを開始した後、継続して取り組んできた「アクティブラーニング」の推進です。グループ学習室やラーニングサポートデスク、プレゼンエリア等で実施してきた、グループで自由に発信し、議論し、学びを深めてきた取り組みは、戻ってくるでしょうか。事態が収束した後、まさに三密となる空間を、そのまま継続して稼働させることが出来るかどうか、半信半疑な状況です。

一方で、これまで、図書館は複数回のウェビナーを展開し、オンラインでの交流も促進してきました。そして、多くの方々が、この事態でオンライ

ンでの活動に参画し、経験を積んでいます。合わせて、5G等の通信規格も進歩し、映像技術等も飛躍的に進歩しています。アクティブラーニングを、オンラインで進めることも、ある程度は見通しが出てきているようにも思います。今後、具体的検討や実施も進んでいくことでしょう。

事態が収束した後、活動はオンラインへ集約すべきでしょうか。それとも、やはり対面での活動を重視すべきでしょうか。図書館でも悩みはつきません。これから、利用者の皆様と一緒に考えていかなければならないことを考えています。ぜひ、皆様の知恵をお貸しください。

世界の図書館

[ドイツ・台湾編]



ハンブルク大学法学部中央図書館 (Universität Hamburg, Zentralbibliothek Recht)

Rothenbaumchaussee 33, 20148 Hamburg, Germany
<https://www.jura.uni-hamburg.de/die-fakultaet/zbr.html>
(英語サイト: <https://www.jura.uni-hamburg.de/en/die-fakultaet/zbr.html>)

ドイツ

法学部 国際関係法学科 教授 佐古田 彰

ドイツ第二の都市であるハンブルクは、ドイツ最大の港を擁しヨーロッパ海運業の中心地の1つである。ここに1996年に、国際海洋法裁判所が設立された。私はこの裁判所の研究のため、2度の長期滞在进行し、またこの10年余り、毎年ハンブルクを訪問している。そのための私の研究拠点が、ここで紹介するハンブルク大学法学部中央図書館である。

私が初めてハンブルクに長期滞在した1999年当時、この法学部の施設は法分野ごとに分かれていてその施設ごとに図書室があった。多くの施設とその図書室は法学部棟内にあったが、私の専門分野の国際法に関わる国際問題研究所と海洋法・海事法研究所は、いずれも大学敷地内になく、大学からやや離れた場所にあった。当時はまだインターネットがそれほど普及しておらず、情報は現地でしか手に入らない。私が初めて法学部を訪問したとき、国際法分野の施設も図書室も見当たらず、途方に暮れたことを覚えている。法学部はこうに法分野ごとに図書室がバラバラにあり、あきれるほど利便性が低かった。

2回目に長期滞在した2008年の時は法学部は大きな改革がなされていて、散在していた図書室が統合され、新しく巨大な法学部中央図書館が作られていた。この図書館は、元々の法学部棟の図書室部分と新たに建設した中央図書館建物の2つから成る(写真1)。これら2つの建物で各階の高さがやや異なるので、両建物を各階で結ぶ渡り通路が水平になっていない。

ドイツでは法学部の卒業要件は司法試験(一次試験)に合格することで

あるため、法学部生の勉強量は凄まじい。図書館には沢山の閲覧席があるが、朝早くから夜遅くまで多くの学生で埋まっている(写真3)。図書館には売店がなくコーヒーラウンジもない。講演会やイベントの類もなく、そもそそのためのスペースもない。ドイツらしいというか法学部らしいというか、徹底

して法律の勉強のための図書利用に特化した図書館である。この点は、本学図書館の方が利用してずっと嬉しい。

他方、本学図書館に参考になる点として、2点触れたい。1つは研究室との近さである。この法学部中央図書館と法学部棟は各階で連結されており、教員研究室とその法分野の図書が同じ階にある。つまり、研究室から図書までの移動距離は、ほぼゼロである。本学中央図書館は研究室から離れた場所にあるが、中央図書館の裏手に研究棟を置き各階で図書館に行き来できると、研究面での利便性が飛躍的に向上するであろう。

もう1つは、図書館の開館時間である。この法学部中央図書館の

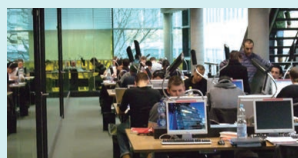
開館時間は、平日で7~23時、土日祝で9~23時で、ほぼ年中無休である。本学図書館は、日祝は午前休館(法科大学院図書室も同じ)で、夏季・冬季に10日近く休館する。日曜日午前の休館はキリスト教大学である本学の教職員・学生が教会に行けるようにするためとも聞か、もしそうだとすると、キリスト教国であるドイツでもこのように日曜日午前に開館している。上述のようなドイツの法学部生の図書館への強いニーズとの違いを差し引いても、大学図書館は研究教育の要であり、本学図書館の開館時間について改善を期待したいところである。



[写真1 左側のガラス張りの建物が法学部中央図書館、右側の建物が法学部棟。両建物は各階の通路で繋がれている]



[写真2 図書館の書架と筆者]



[写真3 閲覧席]



〔写真1 外観〕



台湾

国立台湾図書館 (National Taiwan Library)

23574 新北市中和區中安街八十五號
<https://www.ntl.edu.tw/>

図書情報課 副課長 山下 大輔

台湾には、複数の国立図書館があるが、その中でも、同じく台北に位置している、国立台湾図書館 (National Taiwan Library) と台湾国家図書館 (National Central Library) は、その施設名からは、役割分担を想像することが難しい。

台湾国家図書館は、国民政府により南京に設けられた「国立中央図書館」が前身で、紆余曲折あったが、台北にて復館され、1996年に「国家図書館」と改名され現在に至っている。「漢学研究センター」が設置され、多くの歴史的に貴重な漢籍が保存され、私たちが想像する「国立図書館」としての役割の多くを果たしている。
 (※図書館報162号にて、商学部王忠毅教授が紹介されているので、そちらもぜひご覧いただきたい。)

一方、今回ご紹介する国立台湾図書館は、日本統治期の1914年に、台湾総督府図書館として設立された台湾で最も歴史ある図書館である。当時から、市民に対する閲覧サービスを実施してきたが、大戦により焼失した。大戦後は、1946年に、南方資料館と合併して、「台湾省行政長官公署図書館」として再興され、1948年に教育庁の所属となり、「台湾省立台北図書館」と改称された。その後、1973年に「国立中央図書館台湾分館」と名称変更を経て、これまでの狭隘化した施設、情報化への対応のため、2004年に現在の建物が完成し、2013年に、独立した国立の図書館として昇格し、現在の「国立台湾図書館」に改称された。教育部に所属する公共図書館としての位置づけが強く、国家図書館とは全く別の目的を担っている。

所蔵資料としては、2007年に設立された「台湾学研究センター」に特徴がある。台湾では、特に日本統治下の歴史について、長く積極的に歴史教育に取り入れてこなかった。しかしながら、自国教育の重要性が

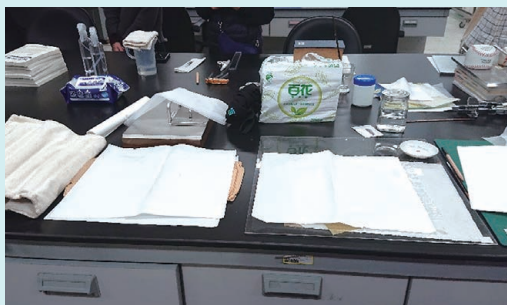
見直され、1990年に「認識台湾」という教科が学校カリキュラムに採用されたことで、「台湾」としての郷土資料の重要性が認知されるようになり、台湾研究に必要な資料を提供するため、このセンターは設置された。台湾学を専門とする職員(司書)を配置して、資料の収集、出版、利用普及に取り組んでいる。しかし、自国教育は、まだまだ多くの課題を有しており、例えば、「教育を受けた年代によって、日本統治時代に対す

る認識の差異は大きく、日本に対する感情は複雑なのです。」と述べていた担当司書の言葉が興味深い。台湾学研究センターには、海外からも多くの研究者が調査に訪れるということで、今後、この図書館が発展していく一つの礎になるものと思われる。

その他、現在力を入れている事業として、親子センターの設立、障害者支援、文献保存等ということで、このあたりは、日本と同じ課題を抱えているようである。台湾でも、少子高齢化は課題であり、図書館の重点サービス対象の一つである。

資料に対する側面では、開館当初から、資料修復に力を入れており、「台湾図書病院」という資料修復部門がある。様々な機材や修復素材を揃え、貴重書の修復を行っている。ただ、現在潤沢な人員が配置されておらず、多くの作業をボランティアが担っている。技術の伝承等を含め課題がある状況である。

2019年末の訪問時、職員の話聞くことが出来たが、この図書館の立ち位置は模索が続くものと思われる。例えば台湾国家図書館、台北市立図書館との棲み分けや独自色の展開は大きな課題だろう。今後の事業の取捨選択、政治的背景への対応、台湾図書館業界の発展を見据える上で、歴史的設立経緯の異なる複数の図書館を政治的な問題の推移と合わせて、興味を持ち続けていたいと思う。



〔写真2 台湾図書病院〕



〔写真3 台湾学研究センター〕

NEW NORMAL

大学図書館のニューノーマル？

—英仏・知の世界へ 時空を超えてひとつ飛び—



左上 三宅敦子 教授 右上 川崎陽奈 図書館員 左下 武末祐子 教授 右下 北垣徹 教授

北垣:4月以降新型コロナウイルス感染拡大のために、残念ながら新入生を大学図書館に迎えることが出来なくなりました。そこで代わりと言っては何ですが、急遽オンラインビデオ会議システムを使って、自宅からでも利用できる図書館のデータベースや電子書籍の利用方法について、ウェビナーを開催しました。

川崎:思った以上に反響がありましたよね。

北垣:ええ、嬉しかったですね。実施後のアンケートに、教員による海外図書館の体験談を聞いてみたいという要望がありました。そこで4月から新しくできた外国語学部の教員3名で、6月末から外国の図書館や美術館のデータベースを紹介するウェビナーを開催しました。

三宅:学生さんはオンライン学習に疲れているということだったので、企画当初はどの程度の参加者がいるのか気になっていました。しかし蓋を開けると予想以上に申し込みがあり、学生さんの学びへの渴望を実感しました。

川崎:今回先生方には、3つの図書館やデータベースをご紹介頂きました。フランス国立図書館(北垣先生)、大英図書館(三宅先生)、そしてフランス文化省美術館総局のデータベースJoconde(武末先生)です。

北垣:私はフランス国立図書館(www.bnf.fr)の「ガリカ(gallica.bnf.fr)」というデジタルアーカイブを紹介しました。16世紀初頭、フランソワ1世が発布した法定納本制度をきっかけとして、王国内で出版される図書はすべて王立図書館に寄贈されることとなりました。18世紀末のフランス革命のとき、王立図書館は国立図書館となりますが、法定納本制度は今に至るまで

受け継がれています。図書館が創設された地であるパリのリシュリュー通りに加え、新館がセヌ左岸トルビャックにできる1990年代から、膨大な蔵書のデジタル化が急速に進み、現在ではガリカを通じて、数百万の文書に世界中から無料でアクセスできます。写本などの稀覯本や、手稿、版画、地図、写真などに加え、音声や動画のデータもあります。

武末:実はフランス文化省は1975年から、フランス全土の美術館・博物館が所蔵するコレクションのデータベース化も始めています。ルーブル所蔵の有名な絵Joconde(ジョコンド＝モナ・リザ)にちなんでJocondeデータベースと呼ばれ、ルーブル美術館日本語ホームページ(www.louvre.fr/jp)の「データベース」サイトからアクセスできます。約60万点の画像と作品情報がデジタル化されていますが、2018年10月以降、その半分の約30万点をオープンリンクのPOP(plateforme ouverte du patrimoine「個人が無償で閲覧できるフランス芸術作品データベースサイト」www.pop.culture.gouv.fr)で見ることができます。テーマ、年代、作者別など様々な検索が可能。しかもPOPは、JocondeLab(ジョコンドラブjocondelab.iri-research.org/jocondelab)という、フランスの多言語政策を反映した、日本語を含む14の言語で検索可能な実験的サイトにリンクされています。これが実は、学生の皆さんがよく使う巨大エンサイクロペディアWikipédiaとのコラボレーションなんです。

もうちょっといいですか?(笑)「バベルの塔」で検索したら最も多かったのは中世写本装飾です。しかし今回、ブリュゲル作品の模写とファルケンボルフのタブローを発見。建築中の控壁をフィーチャーすると、ブリュゲル

の塔には地面から生えている感覚、ファルケンボルフの画像には地面にフワッと乗っている感覚を感じました。ウェビナー視聴者の感想に「宇宙船」、「ハウルの動く城」みたいというコメントがあり、なるほど、未来感覚のバベルって面白いと思いました。あと、市民社会発生期に流行したボードゲームを2点発見。ボードに描かれた螺旋を描く63個のマスの一つにバベルの塔が描かれています。中世とオランダ画家とボードゲーム、という一見何のつながりもないような三つの世界が、こうしてつながるんですよ。

三宅: 武末先生の、このデータベース紹介にける熱意を感じるご説明ですね(笑)! 私は観光地としても有名な大英図書館(The British Library)のホームページ(www.bl.uk/learning/online-resources)を紹介しました。このホームページには、Schools and teachers、Families and community groups、Higher Education、Adults、Online resourcesという項目が並んでいます。所蔵資料をそのままデータベース化してポンと出すのではなく、研究者が現地の読書室で読む書籍を検索する画面の他に、このような自習や教育現場で使いやすいサイトが別途用意されているんです。膨大な情報を検索者の立場に立って図書館が事前に分類しているため、初心者でもアクセスしやすい形に整理されていますから、学生の皆さんには今回ご紹介したサイトを是非一度使ってみて欲しいと思います。

ウェビナーでは、このOnline resourcesからいくつか具体例をご紹介しました。今回紹介されたフランスのデータベースとの違いは、今述べた事情から、Online resourcesのウェブページには、所蔵資料の画像や音声情報に加えて、専門家による解説エッセイがついている点です。独学でも学問的見地から所蔵資料を学べる点が優れていると思います。ずいぶん昔のイギリス留学中のクラスメートに、すぐに「教えてやるよ!(I'll teach you!)」と言ってくる学生がいて、お仕着せがましいなあと思っていましたが、大英図書館ホームページのこういう構成は、大英帝国としてのイギリスの上から目線的な意識の反映かもしれないですね(笑)。

北垣: そういえば、フランス国立図書館には数世紀にわたる地球儀や天球儀などのコレクションが3Dでデジタル化されており、手に取るように見ることができます。クリストファー・コロンブスによる新大陸到達の年に作られた、地球儀【図1】をご覧ください。右手のヨーロッパからアフリカ大陸西岸にかけて、ポルトガルの、そしてスペイン(カスティーヤとアラゴン)の紋章がはためいてますが、広大な大西洋を横切る帆船の向こうに大陸はなく、左手に待ち受けるのは島々、そのなかでひととき大きな島が一つあります。拡大すると、「Cipangu」の文字が見えます【図2】。これ、日本なんですよ。ぜひご自身でガリカにアクセスして、3Dの地球儀をグルグル回してみたり、細部をズームしてみたりしてください!

川崎: ところで、最近の学生さんは何でもネット検索すると思うのですが、データベースとグーグル検索のようなウェブでの

検索は、どう違うのでしょうか。

武末: 二つの検索は、全然違います。今回のウェビナーで取り上げた「バベルの塔」をグーグル検索すると、ブリューゲルのタブローがまず圧倒的に多い。ファルケンボルフもボードゲームも出てこない。データベースでこの二つを探せたのは画像と作品情報が同時関連的に存在するからなんです。特に画像検索の場合、ウェブ検索で出てくる画像とその作品情報は必ずしも関連しておらず、作品の情報量も信憑性も低い。ウェブ上の情報は玉石混交で量も膨大だから、検索するだけでどっと疲れてしまう。

北垣: ガリカのようなデータベースの場合、まずもとの本や雑誌、手稿や版画があって、それらがデジタル化されています。つまり、物質的証拠という裏付けがあるわけです。だから、その裏付けは将来においても残るわけで、それを元にアクセスが保証されるでしょう。ところが、ウェブページには永続性がないので、数年先、いや数週間後でも全く同じソースに辿り着けるかどうかは疑わしい。リンク切れは頻繁に発生しますし、ウェブのデザインなども大きく変わります。

三宅: おっしゃる通りですね。日常生活では、グーグル検索のほうが便利でしょうが、やはり大学での勉学にはデータベースを使いこなせるようになって欲しいですね。出典の明確さと信頼性という点では、学問的見地から構築されたデータベースに勝るものはないと思います。その点、先ほどお話しした理由で、大英図書館のホームページはうまくできているなと思います。これはデータベースというよりも、図書館所蔵のデジタル化資料を使ったウェブページですからね。

川崎: ウェビナーをはじめ、ニューノーマル時代の大学図書館はどのように機能すればよいとお考えでしょうか。

北垣: 今回のウェビナーは、キャンパスに来ることができず、自宅に留まりながら遠隔授業を受けている学生のことを思って企画しました。外国への旅行も留学も当面は不可能になってしまったなかで、何とか知的に外につながる回路を見つける手助けができれば、という願いがありました。また、与えられた課題をこなすだけの学びではなく、知が本来もっているはずの魅力や解放感を伝えることができれば、という願いもありました。そうした願いがどれだけ果たされたかはともかく、多くのことが制限されるなかで、大学での学びの中で何が大事で、何に価値があるのかは、改めて考えさせられた気がします。

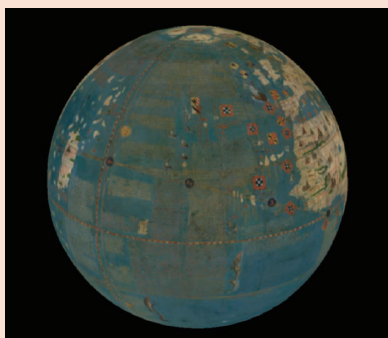
三宅: 本当にそうですね。オンライン授業には人との交流という側面が欠けていますが、オンライン学習の目指すところは本来の自律的な学びですから、自分の内から湧き上がる関心のおもむくままに検索するデータベースを利用する学びは、大学生本来の学びの姿とも言えると思います。

武末: そう、そうです。学ぶ立場に関係なく、個人と図書館・美術館のアーカイブがダイレクトにつながると教育現場などで様々な利用法が生まれるのではないかと思います。ループル美術館ホームページの「ループで見える作品」シリーズにある「モナ・リザ」をちょっと覗いてみると、モデルの女性は当時のイタリアではどこにでもある「ポツェット」pozzettoという椅子に座っていました。神秘性が先行していたモナ・リザが普通のブルジョワ家庭にある椅子に座っていることは新鮮な驚きでした。

川崎: 終了後に実施した視聴学生へのアンケートからは、学生さんの知的好奇心を刺激できたということがわかり、図書館として新たな試みを実施してよかったと思っています。

三宅: そうですね、ほかの学部の方のお話も聞きたいという声も出ていましたから、北垣館長、ぜひ他の学部の先生たちで続編を(笑)!

北垣: 教員の皆様のご協力を期待しています。コロナウィルス感染がいつ収束するのか現時点では予測できませんが、これを機会に図書館としても、物理的な利用が困難な状況でも、学生の皆さんにとって知の拠点としての機能を果たせるよう努めたいと考えています。



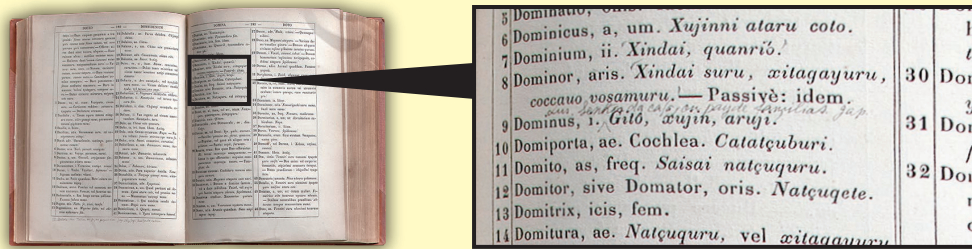
【図1】 La globe Erdapfel de Martin Behaim(1492)



【図2】

プティジャン版『羅日辞書』 Lexicon Latino-Iaponicum

[博物館 892/033/61]



[図1] Dominusの項

長崎の「信徒発見」の場に立ち会ったことで知られるパリ外国宣教会のベルナール・プティジャン神父 (Bernard Thadée Petitjean, 1829-1884) は、長い鎖国の期間に外国人宣教師から信徒教育を受けることができなかったキリシタンのためにさまざまな書物を出版したことで知られています。今日「プティジャン版」として知られるこれらの書物は、1873 (明治6) 年に禁教令の高札が撤去される以前より秘密裡に出版された19種23点、あるいはこれにプティジャン神父の認可のもと出版された書物全般を加えた69点が該当します。プティジャン版は、書物の様式の点から言っても、書かれている内容の点から言っても、その多くがキリシタン時代の出版物 (キリシタン版) に依拠しており、キリシタン時代と明治時代のキリスト教を言語的・文化的に接続するという重要な意義を持っていました。

今回紹介する *Lexicon Latino-Iaponicum* (以下、『羅日辞書』) もまた、プティジャン版として知られる書物の一冊です。書名の通り、「羅」(ラテン語) と「日」(日本語) の対訳辞書である『羅日辞書』は、1870 (明治3) 年にローマ布教聖省の認可を受けて刊行されました。その底本となったのは、禁教以前、天草のコレジオ (聖職者養成学校) にて1595 (文禄4) 年に出版された『羅葡日辞書』であり、プティジャン神父はこの書物を1869 (明治2) 年にマカオで入手していました。『羅葡日辞書』にはラテン語と日本語に加えて「葡」(ポルトガル語) の対訳も付されていましたが、プティジャン神父はポルトガル語の部分省き、日本語にも若干の修正を加えて、現代の宣教師たちにとって使いやすい『羅日辞書』として出版したのです。なお、キリシタン版の『羅葡日辞書』は、わが国では現存が確認されていませんが、

七冊の版本が海外の図書館に保存されており、そのうちの三冊 (旧北堂図書館所蔵本、オクスフォード大学ボドリアン図書館所蔵本、フランス学士院所蔵本) は影印本が刊行されているため、比較的容易に手に取ることができます。それに対してプティジャン版の『羅日辞書』は、明治初期の原本以外で読むことができるのは現在入手不可能な複製版 (宮越太陽堂書房、1945年) か島正三氏の編集による『羅葡日対訳辞書検案』 (文化書房博文社、1971年) に付せられた縮小図だけです。その意味では、『羅日辞書』は本家『羅葡日辞書』よりもアクセスしづらい貴重書と言えるかもしれません。

『羅日辞書』を読むと、今日のラテン語辞書とは異なるさまざまな訳語が明らかとなり、キリシタンの言語世界を体感することができます。たとえば、『羅日辞書』で *dominus* という単語を引いてみましょう。この単語は一般的に「主人」と訳されるラテン語ですが、『羅日辞書』ではまず *Gitô* (地頭)、続いて *xujin* (主人)、最後に *aruji* (主) という訳語が掲載されています。最初に「地頭」が出てくるあたり、時代が感じられます。また、「信仰」と今日では訳されている *fides* という単語を引いてみると、*fitono taxicani mattai coto* (人の確かに全い事)、*chûxin* (忠信)、*xinjit* (真実) という訳語が掲載されています。この検索結果からは、キリシタンの時代にはまだ「信仰」という言葉がキリスト教の用語・訳語として定着していなかったという事実がうかがえます。

西南学院大学図書館所蔵の『羅日辞書』は、現在は西南学院大学博物館で保管されており、キリシタン関係の調査研究に活用されています。なお、2021年より大学博物館で展示する予定ですので、大学に立ち寄る機会があればぜひ実物をご覧になってください。

編集後記

新型コロナウイルス感染症対策の為、4月以降臨時閉館し、ご迷惑をおかけしました。9月以降、閲覧席の一部開放や開館時間の変更を行い、図書館の中でも多くの学生のみなさんをお見かけするようになりました。特に1年生の中には、秋になってようやく図書館に足を踏み入れる人もいないのでしょうか？ 不明なことがあれば遠慮なく図書館スタッフに尋ねてくださいね。

(H.K.)

西南学院大学図書館報 No.189

2020年10月30日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

Email lib-jm@seinan-gu.ac.jp

<https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/>

図書館報バックナンバーも上記サイトに掲載しています。